

景観研究の方法について考える

佐々木 葉

フェロー会員 早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp)

景観・デザイン分野においては研究の方法、手法が必ずしも重視されていないのではないかという問題意識から、その現状と課題を土木学会論文集D1に投稿された139編の論文のレビューから把握した。これを踏まえ、土木計画学における研究概念および質的研究についての議論を参照し、今後の景観、風景、デザイン研究の蓄積と展開をすすめるため、研究の方法への意識化とそのとりくみへの糸口を提示した。

キーワード: 景観, 研究方法, 研究手法, 土木学会論文集, 土木計画学, 質的研究

1. はじめに

本稿では、自戒をこめて、景観研究の方法への意識化を行いたい。その直接的な理由は、どのような研究をするか、何を対象とするか、それによって何を明らかにしたいのか、といった研究の企画段階の議論において、どのような方法、手法を用いるかに関するストックの貧弱さが足かせとなる、ということをしばしば感じるためである。さらには、その感覚の延長線上で手を伸ばした質的研究の方法に関する書籍からの気づき、あるいは土木計画学分野における議論からの再認識がある。こうした自身のいまだ継続中の思考をここに述べることで、みなさんとの議論の機会が得られれば幸いと思う。

そのため、まず景観分野における論文を方法という観点からレビューすることで我々の研究分野の現状と課題を確認し、ついで他の分野の議論を参照することで、景観研究^{注1)}の方法を意識していく際の糸口を提示することを本稿の目的とする。

2. 景観・デザイン研究論文の概観

(1) レビュー対象

いうまでもなく景観研究は学際的であり、理工学系分野の研究者による研究に限っても複数の論文集等において景観に関する研究は発表されている。しかしここでは、土木分野において景観、デザインの研究に携わる我々のホームである土木学会論文集D1(景観・デザイン)とその前身である景観・デザイン研究論文集に2006年から2019年8月までに公開された招待論文を含む139編の論文を対

象とした。論文は土木学会学術論文公開ウェブサイトおよびJ-Stageから閲覧した。

(2) 研究テーマについて

まず対象論文139編の概要として、論文数とテーマをみる。2006年から2010年までは年2回冊子にて発行されていた景観・デザイン研究論文集であり、2011年からは土木学会論文集再編にともないD1部門としてウェブサイトにて随時発行されている。各年の掲載論文数を図-1に示す。改めて、投稿期限が設定されていた冊子体時代の充実が確認される。

論文のテーマについてであるが、その分類には様々なかたちがあり得る。ここでは、筆者が景観研究のミッションという観点から提示した類型をもとに行った。その類型とは、土木計画学ハンドブック²⁾の第13章景観(pp.622-627)において提示したもので、「インフラの建設を通して良い眺めをつくる」「眺めの評価システムの構築」「景観体験の主体の理解」「大地の環境計画としての地域景観計画」「地域・国土の構想・計画の目標像を描く」の5点である。これを意識しながら各論文がどのようなことに対して知見を提供しているかについてのキーワードを付して、それらを表-1のように類型、集計した。また景観・デザイン研究論文集が当初から重視してきたデザインや計画の実践者による知については、独立した分類とした。表-1の大分類ごとの論文数をグラフ化した図-2から、評価の方法を構築しようとする論文がもっとも多いことがわかるが、図-1から経年的な変化を見ると、初期においてその割合が高く、近年は減少している。次いで実践の報告に基づく論文が数の上では多く、本研究論文集の特色の一つと言える。

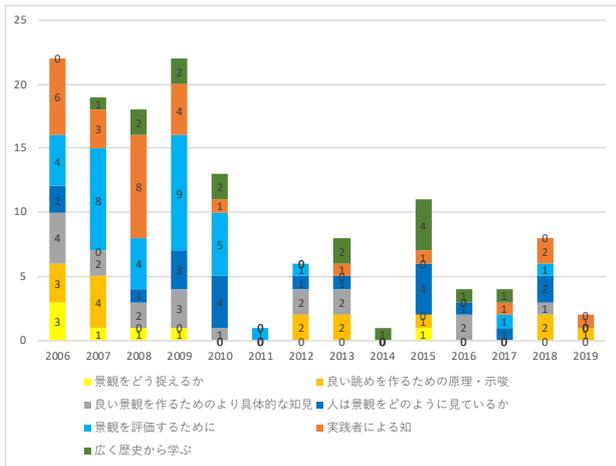


図-1 掲載論文数の推移とテーマの内訳

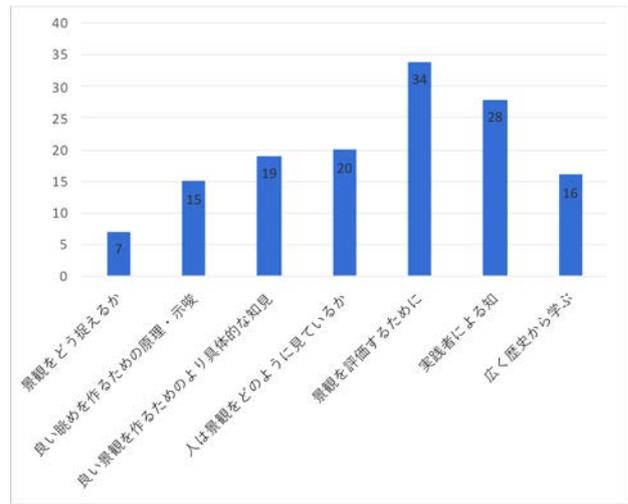


図-2 研究テーマごとの論文数

表-1 論文のテーマ分類と該当する論文数

テーマ分類	数	サブテーマ	数
景観をどう捉えるか	7	景観記述モデル	4
		景観原論	3
良い眺めを作るための原理・示唆	15	規範景観	4
		景観類型	4
		コミュニティ	2
		事例研究	5
良い景観を作るためのより具体的な知見	19	景観コントロール	3
		景観政策	7
		景観調査	2
		景観保全	5
		空間モデル	2
人は景観をどのように見ているか	20	景観認識	5
		景観認知	9
		景観分析	3
		デザイン認知	3
景観を評価するために	34	景観認識・評価	6
		景観評価	21
		デザイン評価	2
		都市空間変遷	5
実践者による知	28	デザイン実践	19
		まちづくり実践	7
		計画設計論	2
広く歴史から学ぶ	16	歴史研究	15
		レビュー研究	1

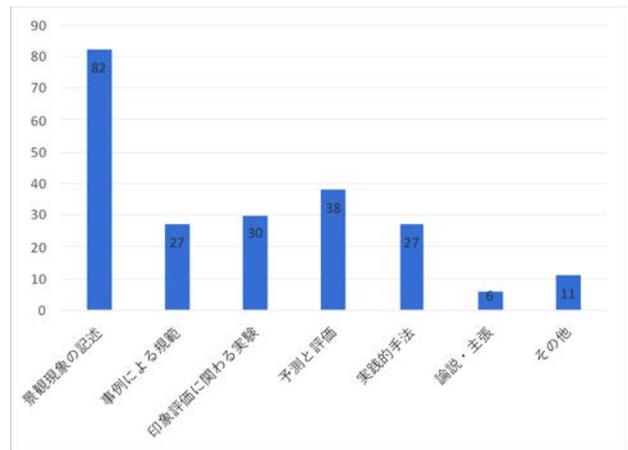


図-3 研究手法ごとの論文数

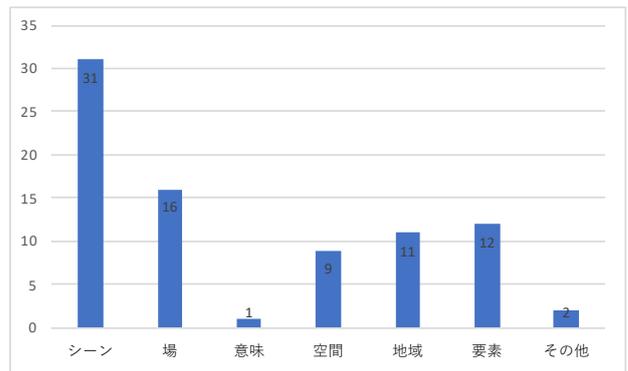


図-4 「景観現象の記述」における対象の内訳

表-2 論文に掲載された研究方法に関するキーワードの一覧

analysis of variance, case studies, covariance structure analysis, CVM, discrete choice model, identity formation model, media comparison, model analysis on policy formation, multivariate additional regression trees, nonlinear regression models, network analysis, outdoor driving experiment, Laboratory experiment, Phot-projective method, point identification method, post facto evaluation, psychological experiment, psychological survey, questionnaire survey, rough set theory, SBE(Scenic Beauty Estimation), GIS, space syntax; space syntax, space syntax, tachistoscopic experiment, method of adjustment; visual evaluation, 統計モデル分析, 樹木構造接近法,

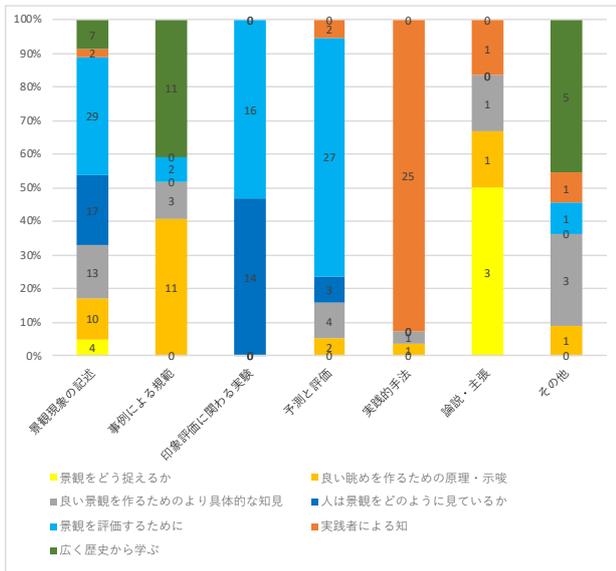


図-5 研究手法ごとのテーマの割合

(3) 研究の方法について

では139編の論文にはどのような研究方法が用いられているのであろうか、具体的な方法に入る前に、まず、論文の中で、なぜそのような方法を用いるのかも含めて研究の方法についてそれなりの記述がなされているかを確認したところ、該当するものは44編で全体の3分の1以下であった。どのように調査したかなどの研究の手順は述べられていても、研究の方法、調査分析の手法に対する意識的な言及がみられないものが多い。実践による知を扱う論文は経緯や内容の報告となり、論説では主張を述べることとなるため、これらではそもそも研究の方法、手法という概念が馴染まないと考えることもできるが、それ以外の論文においても、少なくとも手法を重視しているという傾向は見出せない。キーワードとして方法、手法に関するものが挙げられていたのは24編であり、その一覧を表-2に示す。

次いで研究の方法の内容を見ていきたい。しかしながら景観分野において方法、方法論、手法をめぐる議論はあまり行われておらず、景観工学設立時期に模索された調査方法や実験方法が踏襲されている感がある。そこでここでもひとまず研究テーマと同様に、筆者が土木計画学ハンドブック¹⁾においてまとめた景観研究の手法をもとにする。そこには、大きく「景観現象の記述」「事例に学ぶ規範の探求」「印象評価に関わる知覚・心理学的実験」「予測と可視化」「実践的手法」を掲げている。この分類に論説・主張、その他を加えた7分類で139編の論文の構成を見た(図-3)。一つの論文に複数の方法が用いられている場合もあるので延べ221の方法のうち、景観現象の記述が82ともっとも多い。これはそもそも景観をどのように記述するか、景観現象や実態を調査、把

握、記述すること自体がまず研究において重要な課題であることの現れといえよう。さらにその記述の対象となる景観現象の内容によって82の方法の内訳をみたものが図-4である。やはり透視形態、見えの形としてのシーン・シーケンスを対象とするものが多く、意外にも意味を直接の対象としようとする研究が少なかった。

手法ごとにそれがどのようなテーマの研究論文で用いられているかを見ると、実践的手法が実践者による知に対応するという当然の関係以外において、景観現象の記述はいずれのテーマにおいても用いられ、印象評価実験は「人は景観をどのように見ているか」と「景観を評価するため」の二つが約半々で全てを占めている(図-5)。

(4) 景観研究の方法の例

以上の概観は、そもそもテーマと方法の種類の適切性が保証されているとはいいがたく、また多様な景観研究の動向やタイプの議論へと発展させていくことを意図したものではない。ひとまず139編の論文を筆者なりの読み方で見て行ったときの一つの情報整理である。しかし、景観研究において手法が普遍的に重視されている状況にはない、ということは確認できたように思う。その中であって以下には、研究手法としてある程度まとまりが見られるものについて言及していきたい¹²⁾。

a) 実験心理学的方法

まず明快なのは、認知心理学分野での手法を援用した認知心理学的実験による研究が一つの類型として存在していることである。景観工学の黎明期から用いられているこの方法による論文は、平野²⁾³⁾、白柳⁴⁾⁵⁾⁶⁾らによる研究と、初期においては窪田・深堀⁷⁾⁸⁾⁹⁾らによる蓄積が見られる。このうち窪田らによるものは実験結果を直接的な評価に結びつけようとするものであった。これら認知心理学的方法を用いた論文はいずれも実験の設定に至るまでのロジックと実験手法、分析手法に対する厳密な記述が見られる。その他にもデザインの実践の過程で、デザイン案の決定の根拠を得るために実験心理学的手法による評価を取り入れるという研究¹⁰⁾も含め、評価手法を開発するために実験をもちいる研究¹¹⁾は様々あるが、その結果開発された評価手法がなんらかの現実の場面でスタンダードに適用されているかは心もとない¹²⁾。

b) ケーススタディ

次に事例から学ぶという大まかなアプローチのなかで、規範事例を空間的な指標を使いながら分析することで、良い眺めの原理をできるだけ具体的に示そうとする方法による研究がある。岡田ら¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾や伊地知ら¹⁵⁾による名所的景観を対象としたものや、橋梁を対象とした阿久比ら¹⁶⁾¹⁷⁾などがある。これも景観工学の出発点において試みられた方法であり、その対象や空間的指標の取り方、分析

が展開したものと考えられる。

事例から学ぶアプローチには歴史事例¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾²¹⁾、現代における施策など²²⁾から、また海外事例²³⁾から示唆を得ようとするものがある。また、本論文集における特徴的である実践者が自ら有する情報に基づいて進められるデザインおよび計画の論文も、個別具体の事例のスタディという方法による研究とみることができる。こうしたケーススタディという方法による研究では、そこで提供される情報の厚さ、あるいは実現した事象の背景にあるデザインの思想や手法への展開となる論考の深さが、研究の質につながる²⁴⁾²⁵⁾²⁶⁾。どれほどしっかり調べられているか、調べたあるいは得られた情報の整理分析の切り口といった、記述の厚さを支えるための手法が重要となる。この点については質的研究からの学びとして後に考えたい。

c) 現象のモデル・構造化

いささか大きくくりではあるが、景観現象をなんらかの調査によって把握し、それが生成される要因やメカニズムなどを明らかにするために、概念的なものも含めてモデル化、構造化していくという方法がある。もう少し具体的に言えば、景観および空間の実態、あるいは人々の認識を把握し、それを生成させる原理や社会的条件などに迫ろうとするアプローチである。そこには、要因・結果という注目対象を限定して構造化するもの²⁷⁾をはじめとして、土木計画学分野に軸足がある研究者によってモデルや分析手法を用いている研究として見出され、羽藤ら²⁸⁾²⁹⁾、小谷ら³⁰⁾、秋山らなど³¹⁾³²⁾がある。また政策研究分野でのモデル概念を用いた例として山本³³⁾がある。これら他分野で用いられている方法と手法が景観研究者に浸透することはなく、またこうした手法に長けた研究者の継続的な参入は残念ながら本論文集の中では得られてはいない。

これに対して、未だ方法、手法として複数の論文に用いられるまでには至っていないが、景観現象を多面的なデータから傍証的に明らかにしていこうとするデータの収集分析手法に特徴のある中川ら³⁴⁾、稲永ら³⁵⁾、景観生成の主体と空間・環境の対応によって把握しようとする平内ら³⁶⁾、山下ら³⁷⁾³⁸⁾、景観把握自体のモデルの拡張に挑む遠山ら³⁹⁾などの研究に、方法論への意識的な展開が見出せる。

d) 景観研究の課題

以上より、土木学会景観・デザイン研究論文集および土木学会論文集D1 1分冊に掲載された139編の論文からみた景観研究の現状は、投稿数も含めて、蓄積と展開が順調に進んでいるとは言えない。研究の蓄積には、テーマや方法が類似した研究が複数存在することが必須であるが、それが必ずしも見出せないためである。それぞれユ

ニークなテーマや切り口、手法が工夫されていながら、全体としての蓄積や体系化がなされていないということもできよう。研究の方法としては、景観工学の出発点で用いられた方法をベースにし、一部新たな展開が模索されている状態にある。特徴的であるデザインと計画の実践についての論文は一定の蓄積があるが、それぞれに報告されたコンテンツの厚さと、個別性を超えて実践研究論として展開していくことへの意識は必ずしも共有されていない。これらは我々土木分野における景観研究の課題として認識しなければならない。

3. 土木計画学の方法と実践研究から

前章にて概観した土木分野の景観研究の現状と課題を踏まえ、さてどうしていくかを考えるために、まず、景観分野に一部参加も見られた土木計画学分野の様子を確認しておこう。モデル化や定量化を非常に重視した土木計画学的な研究に対して、定性的で複合的な事象をそのまま扱うことや、個別具体の事例を重要視するのが景観研究の特徴であるという暗黙の認識やプライドを我々は持っているのではなかろうか。しかし土木計画学においても研究の方法についての課題認識は提示されている。以下にその状況を見ていきたい。

(1) 土木計画学の課題と方法論

土木学会土木計画学研究委員会設立50周年を節目として、必ずしも国際的ではないこの研究分野の学問としてのあり方や研究の展開を議論し、まとめる活動が行われた。その成果の一つが土木計画学ハンドブック¹⁾である。前章で言及した第13章景観を含み、全822ページの大著である。その冒頭に「土木計画学とは何か」が小林潔司によって論じられている。まずそこからいささか長文となるが引用したい。

伝統的学問は、すべからくそれ自体の中に方法概念、方法論という学問体系を包摂しているのがつねである。しかし、実践的学問として出発した土木計画学は、それ自体としての固有の方法概念、方法論を体系化するという方向で進化を遂げてきたわけではない。むしろ、土木工学だけでなく関連する分野であるシステム工学、経済学、心理学、社会学等々、関連する伝統的学問分野の研究成果を積極的に活用し、目の前にある問題解決に向かって貢献する。それと同時に、現実問題への適用という応用研究の成果を用いて、逆に、それぞれの学問分野の発展に貢献する。さらに、その成果を土木計画学対象とする現実問題に対して

適用していく。このような実践的学問としてのPDCAサイクルを展開していくことにより発展を遂げてきた。この意味で、土木計画学は、日本社会が直面する課題や問題に対応するために、個別学問領域を超え、「フィールド的な知」の発想方法、問題解決に向かうための実践的方法論を、その学問領域の内部に包含することを宿命としてきた。¹⁾(p4)

この引用部分における「土木計画学」を「景観・風景学」や「景観デザイン学」として読み替えることには全く違和感はないのではないだろうか。後半の成果に関する自己評価の部分を除いては、時に我々とは水と油のように感じてきた彼らも、実は同じ悩みを持っている、のかもしれない²⁾。

ハンドブックでは、上記引用部分のような学問としての位置付け、特質を踏まえて、実践的学問である土木計画学の方法論について小林の試論が展開される。その中から方法論に関わる部分を私なりの理解として要約すれば以下ようになる。

伝統的学問が依拠してきた原理に対する新たな学問としての原理としては、1) 普遍性の原理には個別性の原理、2) 論理性の原理にはシンボリズムの原理、3) 客観性の原理には能動性の原理があり、主観と客観、主体と対象の厳密な分離を前提とせず、対象地域のいまに答えていくためにはこうした原理が必要となる。とはいえ、従来の実証的な科学が重視してきた普遍性、論理性、客観性が不必要になったわけではなく、実践的学問では、フィールド的な暗黙知を形式知に変換操作することが求められる。そのプロセスにおいて、伝統的学問で共有された方法論以外の何らかの方法を用いる際に、その方法自体の妥当性を研究者自らが論証する必要がある。このプロセスを「客観化の客観化」と呼ぶ。しかし「客観化の客観化」のための道具立て(実践モデル)はまだ開発されていないため、そのヒントとなりそうな形として、フィールド実験、フレーム分析、橋渡し理論、省察、を紹介している。

ヒントとなりそうな道具立てのそれぞれについては、ここでは踏み込まない。確認しておきたいのは、上記のような研究に際しての構えや意識は、我々の景観研究分野では実はすでに共有されているのかもしれないが、それを表立って景観研究の方法論や研究の体系として議論することはほとんどなされてこなかった、ということである。特に「客観化の客観化」プロセスへ意識を向けることは、客観化のかたち、つまりデータの取り方や分析の方法を我々なりのやり方で編み出していくことへの意識化であり、個別の研究の中でそれぞれ一定程度は行われていたであろうこれまでの工夫を、こうした観点から

吟味することは意義があるとが考えられる。

(2) 土木技術者実践論文集から

さて、前節にて紹介した小林による論考のかなりの部分は、2010年に土木技術者実践論文集が創刊された際の招待論文³⁾の内容である。翌2011年から土木学会論文集F5となり、2019年8月までに56編が掲載されている。2010年に15編、2011年に13編と集中的に搭載された以降は、年に1もしくは数編となっている。多くは実践者による様々な事例報告であり、研究論文を作成するに際しての方法、手法に意図的なものは多くない。その中であって実践事例を分析し、そこから知見を導くことを目的とした論文では、方法を重視しているものがある。物語に対する解釈学的方法論⁴⁾、実践プロファイル手法⁵⁾、エンパワメント発現モデル⁶⁾などである。これらの手法を用いたことによる研究成果の意義については判断ができないが、他分野でも用いられている方法、概念モデルを明確に研究方法のなかに位置付けることで、同様の手法や概念モデルを用いた研究との比較や総合的な考察をすることは可能となるであろう。

実践研究を対象とした論文集を立ち上げるという意図は、創刊号の小林の招待論文にあるように、実践的学問としての土木計画学のフィールド的知への注目から来ているであろう。土木学会論集F5の編集方針⁷⁾では、「個々の要素技術の深化に関わる論文集ではなく、そうした土木技術者の「実践」そのものを論ずる論文集」であるとし、とりわけ「新規性」と「有用性」を携えた実践事例や「土木技術者の実践に関わる基本的な考え方を論じ」ることが意図されている。この論文集での取り組みから今すぐに学べることを見出すのは難しいが、参照、比較することで、景観・デザイン研究論文集において重視した「デザインや計画という創造的行為に焦点をあて、自らの実践の中で経験・創造した工夫やアイデアを論じ」る研究の位置付けや特徴を考えることはひとまず試みられてよいと思う。

4. 質的研究の方法から

景観・デザインの研究分野では、多くが定性的なデータを扱い、その分析過程も研究者の解釈や読み取りとして進められる。そのプロセスの妥当性や客観性は、研究者の意識に委ねられている感もある。そうしたいささか曖昧な状況に対して、質的研究、質的調査というフラッグのもとで研究に関する考え方や概念、具体的手法を整理、提案し、量的研究に対峙可能な研究世界を立ち上げるための議論が行なわれている。その背景のひとつに

は、エビデンスに基づいた意思決定、判断が求められる社会的状況にあって、定量的なデータや分析結果だけではなく、定性的なそれもエビデンスとする必要があることがある。医学や教育の場面では、定量的なエビデンスだけでは大切なことが欠落してしまうため、定量化がむずかしい定性的な情報をエビデンスとして位置付けていくための研究として、質的研究論文へのニーズが高まっている。これに対して、定量的な研究では把握できない事象や問題の核心に触れて行きたいという社会学分野における強い動機からも質的研究は注目されている。

ここでは上記2側面のアプローチに該当する図書の例から、質的研究に関する議論が我々の分野の研究にどのような示唆を与えてくれるかを確認しておきたい。

(1) 社会学における質的研究

まず、社会学の分野を見てみよう。この分野ではインタビューや参与観察といった研究方法のもとで、統計データ以外に言葉や記録を基礎データとして進められる研究は多く、それらのデータを扱うための方法や手法が早くから構築されてきた。グラウンデッド・セオリーをはじめとしたデータのコーディングはその代表例であろう。これら個別の手法を参照するのは具体的研究の中でとして、数ある質的研究や調査に関する図書の中でランダムに手にとったなかから興味深いと思ったことを書き留めておきたい。

まずは、佐藤郁哉による問いかけである⁴⁵⁾。佐藤は、着眼点やアプローチ、調査はそれなりにできていても、「薄い記述」と呼ばれる研究があり、それが7つのタイプに整理されている。曰く、読書感想文型、ご都合主義的引用型、キーワード偏重型、要因関連図型、ディテール偏重型、引用過多型、自己主張型である。我々の分野でも心当たりがあるような指摘ではなかろうか。これらを克服し、「分厚い記述」に変えていくための方法や手がかりとして、質的データの分析法を示している。こうした方法への意識化と幾つかの手法は、2章(4b)で述べたケーススタディによる研究を分厚くするための力となるのではないだろうか。

次に、岸政彦は、研究の根幹となる調査という行為における覚悟のようなものを考えさせる。「断片的なものの社会学」⁴⁶⁾という本を偶然手に取り、その後岸がすでに手元にあった「質的社会調査の方法」⁴⁷⁾という教科書的な本の主執筆者であったことに気づいた。さらに「マンガと手榴弾」⁴⁸⁾によって、「社会の理解と記述」の新たなフレームワークを社会学に確立する、そのための調査研究手法を明確にするという研究意志の強さが、コンテンツのインパクトの大きさはまた別に、強く体響いた。社会とは、生活とは、生きるとは、それを理解

するとは、調査や研究としてそれに向き合うとは、こうした問いが調査の実践とその方法への自問、他研究者の方法との比較によって問い詰められていく。岸は生活史調査という方法によってそれを確立しようとしている。生活史調査について、以下のように述べられている。

生活史調査とは、個人の語りに立脚した、総合的な社会調査である。それは、ある社会問題や歴史的事件の当事者や関係者によって語られた人生の経験の語りを、マクロな歴史と社会構造に結びつける。語りを「歴史と構造」に結びつけ、そこに隠された「合理性」を理解し、記述することが、生活史調査の目的である。

(中略) 統計データや文書資料などの力も借りながら、特定の歴史的・社会的条件—私の言い方言えば「歴史と構造」—のなかで生きている人々の人生について考える方法である。

個人を通して社会を考え、社会を通して個人を理解する。⁴⁹⁾(p.3)

このスタンスは、風景とは、景観とは、まちとは、地域とは、デザインとは、を調査研究することへの刺激と示唆をたっぷりと含んでいる。

何れにしても、曖昧で捉えどころがなく、個別具体的である社会に対して、研究として向き合うには、向き合いかたそのものに概念を与え、実践の手法に意図的にならねばならない、という文脈の上で、質的な研究、調査の方法に対する議論が重ねられている。

(2) 量的研究に対峙する質的研究の方法

次にある意味で岸とは対極的なスタンスで学術研究の世界での質的研究を語っているものとして大谷尚の「質的研究の考え方」⁴⁰⁾という図書がある。EBM(evidence-based medicine)のための医学分野における質的研究や教育分野の研究をもとに、どうやって質的研究の方法で研究をするか、学術論文を書くか。そのために必要な考え方、思考の整理方法、具体の手法が懇切丁寧に綴られている。色々な意味で役に立つ一冊である。定量的だと客観的だが定性的だと主観的、というようなよくある思い込みの解きほぐしや、サンプルという概念への問い直し、リサーチクエスションの立て方など、学生に一通り読んでおいてほしい内容が詰まっている。後半には著者が開発したSCATという質的データの分析手法の解説が控えているが、それを直接参照するかは別にして、研究を進め、論文を書くためのリテラシーを得るためには、やはりこうした方法についての指南書が、特に現代においては必要なのだなど実感できる。

5. 景観研究の方法への意識化とその糸口

以上を踏まえ、まずは様々な場面で研究方法を意識することを心がけていきたい。その際、特に取り組んで行きたい糸口について、簡略ではあるが以下に提示する。

a) 研究リテラシーの手引き

まず2章(3)dで述べたように、景観研究の方法が景観工学出発点でのそれをベースにしていることから、以下のように考えられる。景観研究そのものが半世紀の歴史を有しているため、初学者にはその経緯と共に研究の体系や用いられてきた方法を一通り理解してもらう必要があり、拙著⁵⁰⁾にて景観工学の第一世代による成果とその後の実践の経緯を取りまとめ、そのなかで研究の方法、分析手法についても初期の例を紹介してはいる。しかし学術研究に取り組むためには、もう一段深いレベルでの体系化や手法についての手引きが必要である。トピックごとに参考となる研究論文などを収録し、解説を付した本が海外ではよく見られるが、そうしたスタディーズ形式も考えられ、ウェブ公開する形でもよいだろう。そこには、ハウツー的なレベルでの研究の進め方やコツを我々の分野にカスタマイズしたものも含めたい。

b) 景観の概念定義とそれに対応した方法

上記が景観研究論文数を増やし、裾野を広げることに資するとすれば、もう一方でフロンティアを開拓するための研究の方法への意識化が必要である。景観工学の方法は視点と視対象などからなる篠原の景観把握モデルによって景観を定式化した。それ以降、景観は面的な広がり、人々の生活、心象風景などの異なる層で議論されつづけている。景観へのこうした様々な眼差しがある中で、何を研究するか、何を明らかにするか、それによって何に資するかというリサーチクエスションの設定と、どのように研究するか、調査分析するかが表裏一体の問いとして我々の前にありつづけている。

山口は公共デザインという文脈の中で、それを論じるために必要な景観概念の再検討の重要性を述べている⁵¹⁾(p.43)。鳥越は風景を自然、社会、精神の相互に交流する三層からなるとし、それぞれへのアプローチとしての取り組みや捉え方から風景の創造と破壊を考えようとしている⁵²⁾(終章)。つまり、問題とする問いとは景観をどのように捉えるか、その定式化に関わり、それを概念モデルとして、さらにその概念に基づいてどのような調査、分析を行うかの方法が問われ、その方法の構築が求められる。その意味で藤倉らは、「空間と社会を結び生活を育む風景」を対象として、その変化、危機、再生、創造といった関心を論じるための実証的分析の手法として「空間-社会構造図」などを用いた研究方法を開発している⁵³⁾(7章)。ここまで深い方法論へ到達するのは容易で

はないが、優れた先例として学ぶとともに、2章(3)cで触れた方法への意識的展開がみられる研究などから新たな方法論が確立されることを期待したい。

c) 概念や手法、ツールのネーミング

最後にそれぞれの場面で意識する方法として、研究の方法に関わる概念、モデル、手法、ツールなどに名前をつけることが考えられる。他分野、隣接分野からの援用、独自開発の場合も、名前によって共有されることは研究の蓄積につながる。仮想行動のように、研究の議論において不可欠な概念を研究の方法論として捉えなおすことも必要であろう。もちろん名付けによってその中身が空洞化する危険に留意しながら、例えば「街並みメッセージ論」³⁾のような命名と使い方は、もう少し意識化されてよく、デザインの実践における「デザインノート」⁵⁴⁾(p.228)のような手法についても同様である。

以上、本稿はまさに自省の論考であったが、土木の分野において景観研究に携わるみなさんにもこの課題意識が共有され、何らかの一步につながれば幸いである。

補注

注1) なお本稿では景観と言う語に風景も含め、景観、風景、そのデザインに関して我々が取り組んでいる研究を総じて景観研究と呼び、景観研究と風景研究などを差別化しない。

注2) 以下具体的にあげた論文は、それぞれについてのあくまで例示であり、当然ながらそれ以外にも該当するもの、方法および成果において優れた論文はある。

注3) 例えば環境アセスメントにおける景観影響評価の手法には、見込角1度や、メルテンスの法則を根拠にした指標などが永年使われているが、これらの評価手法や指標が適切ではない事例や新たな評価手法・指標が求められるケースもあり、対応が急務である。

注4) あるいは土木計画学の発展が、関連分野から援用した手法を特定の事象に対して精緻に適用することに傾注しすぎ、現場という総合的で多面的な現象へ向き合う側面が不得意になっていることを問題視しているのかもしれない。

参考文献

*以下のリストの2)~39)はすべて土木学会景観・デザイン研究論文集(No.のみのもの)と土木学会論文集D1(Vol.とNo.があるもの)である。

- 1) 土木学会土木工学ハンドブック編集委員会編：土木計画学ハンドブック、コロナ社、2017 出版社の特設サイトでお目次やキーワードなどが閲覧可能。
<http://www.coronasha.co.jp/doboku-hb.html>
- 2) 平野勝也・日高良文：和風店舗のイメージ形成における統辞論的コードの役割、2006, No.1
- 3) 平野勝也・青木健一：婉曲的記号に着目した店舗の「しつらえ」と街並みのイメージ、2006, No.1
- 4) 白柳洋俊・平野勝也・和田裕一：感情ブライミング効果に着目した商業地街路の基本的性格：2013, Vol.69, No.1
- 5) 白柳洋俊・平野勝也・和田裕一：店舗の知覚過程における注意の偏り、2015, Vol.71, No.1
- 6) 白柳洋俊・平野勝也・河田泰明：検索手がかりによる街並想起の促進及び抑制、2018, Vol.74, No.1
- 7) 狩野哲志・窪田陽一・深堀清隆：都市河川に架かる歴史的橋梁の構造形態を考慮した夜景照明手法、2006, No.1

- 8) 長岡宏樹・窪田陽一・深堀清隆：情報認知量に着目した屋外広告物の視覚特性分析, 2007, No. 2
- 9) 山口剛志・窪田陽一・深堀清隆：歩道におけるセンサー照明の活用形態と光環境, 2007, No. 2
- 10) 張挺・八馬智・杉山和雄：「飽き」に着目した道路シークエンス景観の評価構造に関する研究, 2006, No. 1
- 11) 福井恒明・松江正彦・内藤充彦：歴史的街路の印象に与える緑の導入効果に関する研究, 2008, No. 5
- 12) 稲葉諒介, 岡田智秀, 横内憲久：都市部のウォーターフロントにおける飲食店の夜景成立要件に関する研究—「東京夜景」に着目して—, 2018, Vol. 74, No. 1
- 13) 田島洋輔・横内憲久・岡田智秀：潮入り庭園を通じて見たわが国における海の親水概念と空間構成に関する研究, 2007, No. 2
- 14) 渡辺太樹・横内憲久・岡田智秀・三溝裕之：「虹の松原」における景観管理方策に関する研究 管理内容と景観価値との関連性, 2006, No. 1
- 15) 伊地知大輔・佐々木葉：東京都心部の中小河川における名所の変遷と特質に関する研究, 2007, No. 3
- 16) 阿久井康平・嘉名光市・佐久間康富：大阪第一次都市計画事業の橋梁意匠にみる橋梁付属物と市街地における時空間的展開, 2016, Vol. 72, No. 1
- 17) 阿久井康平・嘉名光市・佐久間康富：市区改正条例準用都市における水辺市街地の近代化と橋梁デザインの特徴, 2015, Vol. 71, No. 1
- 18) 林倫子・篠原知史・大坪舞：大阪中之島山崎ノ鼻「公園地」に関する一考察, 2017, Vol. 73, No. 1
- 19) 八尾修司・山口敬太・川崎雅史：戦前期大阪における公園道路網計画と桃ヶ池・田邊公園道路の形成, 2015, Vol. 71, No. 1
- 20) 山口敬太・土屋峻・久保田善明・川崎雅史, 京都東山の地形景域の構造と名勝地の景観一開度の概念に基づく地形的圍繞の評価一, 2013, Vol. 69, No. 1
- 21) 藤井俊輔・笠原知子・齋藤潮：南湖における田園の名所化と「共楽」の思想に関する研究, 2009, No. 6
- 22) 樋口明彦・牟田口千尋・真鍋政彦・高尾忠志：都心街路空間における公園的空間の創出に向けた取り組みについてのケーススタディ—札幌市・仙台市・広島市を事例として—, 2007, No. 3
- 23) 木村優介・山口敬太・久保田善明・川崎雅史：鉄道跡地の遊歩道利用におけるレールバンク制度の運用と有効性—ハイラインにおける合意形成の制度的枠組み—, 2013, Vol. 69, No. 1
- 24) 星野裕司・小林一郎：風景演出のためのトンネル坑口デザイン, 2006, No. 1
- 25) Momoru KAWAGUCHI : A FEW THOUGHTS ON HOW WE DEFINE STRUCTURAL FORMS 2006, No. 1
- 26) 増山晃太・山本良太・星野裕司・小林一郎：熊本駅周辺整備における都市デザインの戦略と展開, 2009, No. 7
- 27) 大庭哲治・松中亮治・中川大・山根和人：規制強化による屋外広告物の設置状況変化の因果構造—条例改正前後の実態調査に基づいて—, 2012, Vol. 68, No. 1
- 28) 國分昭子・羽藤英二：既成住宅市街地個別更新における敷地動態選択モデル推定とシミュレーションによる住宅地景観形成と相互作用に関する研究, 2013, Vol. 69, No. 1
- 29) 福山祥代・羽藤英二：バルセロナの歴史的発展過程と歩行者の行動圏域を考慮した広場—街路のネットワーク分析, 2012, Vol. 68, No. 1
- 30) 小谷仁務・横松宗太：アーティファクトとしての地域資産と住民のアイデンティティ形成：カテゴリー選択モデルアプローチ, 2015, Vol. 71, No. 1
- 31) 秋山岳・岩倉成志：優等列車の車内デザインを考慮した旅客需要の分析手法—小田急ロマンスカーを対象に一, 2012, Vol. 68, No. 1
- 32) 大庭哲治・青山吉隆：まちなみ保全に対する奉仕労働量のCVM推計における準拠集団の影響, 2008, No. 5
- 33) 山本慎一郎：景観法成立過程の政策形成モデル分析, 2006, No. 1
- 34) 中川晃太・中村晋一郎：木材業に着目した名古屋・堀川における水辺空間とその利用の変遷に関する研究, 2018, Vol. 74, No. 1
- 35) 稲永哲・星野裕司・増山晃太・尾野薫：都市形成における賑わいと街路網の関係に関する研究, 2010, No. 9
- 36) 中内和・山田圭二郎・川崎雅史：下北沢の商業系街路空間を巡る地域的ルールの形成に関する研究, 2015, Vol. 71, No. 1
- 37) 山下三平・丸谷耕太・林珠乃・大森洋子：窯元とその家族の目を通した陶芸の里・小鹿田皿山の景観とその評価, 2018, Vol. 74, No. 1
- 38) 山下三平・丸谷耕太・内山忠・栗田融：陶芸の里・小石原皿山の景観表象の把握と評価—実存的景観論の試み—, 2017, Vol. 73, No. 1
- 39) 遠山浩由・星野裕司・小林一郎・増山晃太：状況景観的視点に基づく眺望計画の一提案—熊本県三角港を対象として—, 2008, No. 5
- 40) 小林潔司：土木工学における実践的研究：課題と方法, 土木技術者実践論文集, Vol. 1, 2010
- 41) 澤崎貴則・藤井聡・羽鳥剛史・長谷川大貴：「川越まちづくり」の物語描写研究—町並み保存に向けたまちづくり実践とその解釈—, 土木学会論文集F5 (土木技術者実践), Vol. 68, No. 1, 2012
- 42) 坂本真理子・山中英生・澤田俊明：実践プロファイル手法を用いた農山村地域外部協働コーディネーターの役割・課題分析, 土木学会論文集F5 (土木技術者実践), Vol. 72, No. 1, 2016
- 43) 西宮宜昭・花岡伸也・松浦由佳子：インフラ建設主体のコミュニティ開発プロジェクトのエンパワーメント発現メカニズム, 土木学会論文集F5 (土木技術者実践), Vol. 72, No. 2, 2016
- 44) 土木学会論文集 F5分冊編集小委員会ウェブサイト：http://committees.jsce.or.jp/jjsce_f05/node/1
- 45) 佐藤郁哉：質的データ分析法, 新曜社, 2008
- 46) 岸政彦：断片的なものの社会学, 朝日出版社, 2015
- 47) 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美：質的社会調査の方法—他者の合理性の理解社会学, 有斐閣, 2016
- 48) 岸政彦：マンガと手榴弾—生活史の理論—, 勁草書房, 2018
- 49) 大谷尚：質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで—, 名古屋大学出版会, 2019
- 50) 佐々木葉：ゼロから学ぶ土木の基本—景観とデザイン, オーム社, 2015
- 51) 山口敬太・福島秀哉・西村亮彦：まちを再生する公共デザイン—インフラ・景観・地域戦略をつなぐ思考と実践, 学芸出版社, 2019
- 52) 中村良夫・鳥越皓之・早稲田大学公共政策研究所：風景とローカルガバナンス—春の小川はなぜ失われたのか, 早稲田大学出版部, 2014